

んは「今日は寝れん。ご飯も食べられん。こんなつらいことは初めてだ。もう行きたくない」と言っておりました。

「そんなに大変なのか。それなら俺が行く」と言って、次の日から私は現場に出勤しました。

毎日行く班が替わるものから、みんな段取りが分からないうんです。毎日出ているのは私だけです。ある程度、段取りが分かっていたので、私が指揮官を買って出ました。

全員防護服を着ています。顔が分かりません。だから私は背中に「市長」と書いてもらいました。そして毎日現場でうちの職員に指示していきました。

そのうち全国各地から動員された獣医さんや自衛隊の間で、「あのイチナガという男はよく働くなあ」と噂になり、有名になりました。

季節が6月になりました。梅雨ですから毎日雨です。足下はぬかるんで全身、泥と糞まみれです。かと思えば日が照ると暑い。消石灰を撒くのでそれが肌に入ってしまった。そういう環境で牛や豚と格闘する日々でした。

1日あたり牛を300頭、400頭、豚を1500頭、200

00頭のペースで殺処分埋葬しました。

県が非常事態宣言を出したのは第一例目の発生から約1か月後の5月18日でした。感染の広がりが止まらないんです。同時に国内初のワクチン接種を国は発表しました。

第一例目発生の農家から半径10⁺圏内の家畜は健康な家畜であつてもすべてワクチンを打ち、殺処分して、そのエリアを無家畜状態にすることで蔓延を防ぐという対策です。

これには多くの畜産農家が反対しました。ワクチンは感染を予防するために打つわけですが、「家畜伝染病予防法」という法律によると、ワクチン接種と殺処分・埋葬はイコールの関係なんです。

その時はまだ西都市内には1頭も感染家畜が出ていませんでしたが、それでも10⁺圏内に入っている農家がありましたから、その健康な牛を殺処分しなければなりません。農家の心情を思うと私はたまらなくて、必死で国や県にワクチン接種の反対を訴えました。

しかし、5月20日、ついに西都市内で口蹄疫発生の連絡が入り、私はしばらく身動きができないほど放心状態になりました。

翌日、私は県庁に向き、当時の東国原知事に「ワクチン接種やむを得ず」と伝えました。

その日から一軒一軒、ワクチン接種を農家にお願いたし、いけません。畜産技術員の時代にお付き合いのあつた農家から訪問しました。

Aさんは80歳を過ぎた繁殖農家の方でした。奥さんを先に亡くされ、1人で牛3頭を飼っていて、それを生きがいに日々頑張っている人でした。

夕方6時頃に行きました。Aさんは仕事を終えて、焼酎を飲みながらテレビを見ていました。

「何か面白いテレビをやっていますか？」と言って家に上がらせてもらいました。しばらく世間話をしました。

牛の話になりました。

「うちの牛は点数がいいですよ。登録検査が83点でした」と嬉しそうに言っています。

「それはようできた牛ですね。よく育てられましたね」と私が言うのと、笑みを浮かべながら、「あと2、3日したら孫が産まれるんですよ。孫の顔を見るのが楽しみじゃ」と言いました。

「孫」というのは牛の子どものことです。私は、「ワクチンを打たせてください」と言いに行つたのです

が、一言も言えずに、その日は帰りました。

翌朝、Aさんに電話をしました。ワクチンを打つのは国の命令です。法律でそうなっていますからどうしようもないんです。

そしたらAさんは「市長、昨日はワクチンを打たせてくださいと言いに来たつちやうが。分かっちゃうぞ」と言っています。

そしてこう続けられました。「ワクチンを打ちにすぐ来い。はよ来んと俺の気が変わつぞ」

私はすぐ獣医さんに連絡して職員と一緒に戻りました。そういう悲哀がたくさんありました。

他にも「日本刀を構えているから来い」と脅す人もいました。「うちの牛舎では殺さんでくれ。この近くに埋めんでくれ」という人もいました。

私ができることはすべての農家さんのために国の補償をしつかり取り付けることでした。

(1月29日、宮崎市倫理法人会の「ワンングセミナー」にて取材、編集・水谷謹人)

【はしだ・かずみ】昭和28年西都市に農家の長男として生まれる。宮崎大学大学院農学研究科修了。(社)宮崎県畜産登録協会、県議会議員を経て平成17年から西都市長を3期務める。現在は宮崎県サッカー協会会長。著書に『畜産市長の「口蹄疫」130日の闘い』(書肆侃侃房)がある。